

51年度一般会計決算

款	金額(万円)	構成比
村地方交付税	5,835	4.9
国庫支出金	56,069	47.1
県庫支出金	9,691	8.1
県債	20,674	17.4
他	15,490	13.0
歳入計	11,180	9.5
歳入計	118,939	100
歳入計	2,231	2.0
歳入計	17,841	15.8
歳入計	14,253	12.6
歳入計	6,329	5.6
歳入計	20,695	18.3
歳入計	113	0.1
歳入計	18,421	16.3
歳入計	12,538	11.1
歳入計	8,207	7.3
歳入計	12,167	10.9
歳入計	112,795	100
歳入計	6,144	—

51年度病院特別会計決算

項	金額(万円)	構成比
医業収益	15,805	86.7
医業外収益	2,420	13.3
(村補助費)	(1,894)	(10.4)
(国補助費)	(228)	(1.3)
歳入計	18,225	100
医業費用	19,569	96.2
(給与費)	(12,220)	(60.1)
医業外費用	776	3.8
歳出計	20,345	100
純損失	2,120	—

(注) 純損失は国へ政策配慮を要求するため、あててそのまま計上し借入金でまかなっている。

ためようだった。つまり過疎という条件を逆手にとっているのである。

それに過疎地であるがゆえに、村営病院と競合する開業医がまったくない点も、保健医療行政をすすめるうえで好都合になっているようだ。いまよく言われる「地域包括医療体制」をスムーズに定着させる条件があるといつてよい。

総じてみるに、福祉施策がほんとうに効果をあげるまでには、一〇年ないし一五年という長い時間の単位が必要だということを感じさせられるし、もう一面では、自治体というのは、首長の考え方やその取り組み姿勢によって、住民サービスに濃淡の

差がはつきり表われるものであることに驚きを感じた。もちろん国に対して、交付税率の引き上げなど自主財源確保のための要求や運動は続けなければならないが、国の施策がだめだから何も充分でないなどというのも、卑怯な逃げ腰と思えてならない。東北の寒村沢内村は、さまざまな教訓を現実提示してくれている。帰りがけにマイクを向けて村民に感想を求めたら、

「ほんとうに沢内村に生まれてよかったと思っています。年寄りが集まると、だれかが必ずそう言います」

とおだやかに話してくれたおばさんの笑顔が忘れられない……。

これは、岩手県の特長な条件下における、特殊な村の試みではない。長野県でも医療に苦悩する過疎村なら採用できることである。

(長野市在住・南安曇郡穂高町出身)

季刊 地域と創造 一九七七年秋 (Vol.3) (一九七七年十月一日)

警告エッセイ

中国の政治・日本の政治・信州の政治

なかじま 中嶋 嶺雄
(東京外国語大学・政治学)

「地域と創造」編集部求めでは、「警告エッセイ」として中国の政治を含めながら日本の地方政治にたいして書くべし、とのことである。正直いって、これは大変な難題ではないか。

同じ政治という言葉を用いても、中国の政治と日本の政治とは、今日、その政治のシステムや形態が異質であるばかりでなく、そもそも中国人の政治観と日本人のそれとは根本的な相違があるような気がする。そのうえ、信州の地方政治ということになると、郷里のこととはいいながら、私には語るべき資格も情報もない。

もつとも、ひとりのわが国の知識人がしばしばそうしたように、中国革命への共感といわゆる中国にたいする贖罪の意識から出発して、その延長線上に中国の政治のありよう(た

たとえば「大衆路線」とか献金運動、もしくは党風、作風の改革など)を鏡として位置づけ、それに比較してわが国の政治のありようを告発するという一見、賢明なようで実は安易な方法がとれるなら、それも一つの比較考察かもしれない。

だが、今日の中国政治を見つめていると、当の中国自身が、その政治のありようをめぐる激動と評価の逆転をくりかえしているのではない。少なくともこの十余年、文化大革命から追放の鄧小平再復活、そして「文化大革命最終宣言」に見られる中国共産党十一全大会の模様を見るかぎり、中国の政治を鏡として語っていればそれで済まされるほど状況はお目出たいものではない。つまり、鏡が曇ってしまっただけではなく、メチャメチャに壊れてしまったような気がする。現に

中国では、この間、党大会ごとに、いずれもまたたく間に反故になるような政治文書を連ねてきた（一九六九年の九全大会における林彪政治報告、七三年の十全大会における王洪文党規約改正報告そして……）。大会ごとに党規約が改変され、やがて憲法も改変されるのだが、このような現実には、党規約や憲法が党と国家の運営の規範として存在するのではなく、不断の党内闘争の結果、つねに恣意的に無視されつづけてきたことの追認でしかないであろう。つい先日までは、文化大革命の英雄的な担い手として、また文化大革命の「新生事物」の体現者として、あるいは「老・壮・青」三結合の典型としてたたえられてきた王洪文、張春橋、江青、姚文之らは今日「四人幫」英語では四人のギャング Gang of Four と表現される）として蛇蝎のごとく嫌悪され、罵られているのだ。教育革命や下放運動の模範英雄が「野心家」、「陰謀家」とされ、とくに江青夫人は「样板戲」としてオペラや革命バレーとともに、徹底的に罵倒されて、まさにヨーロッパ中世の「魔女狩り」を思わせるほどである。

このような中国の現実を無視して、中国における政治を語ることは私にはできない。そもそもこのような政治的現実の渦中であって、中国民衆は、政治をどう考えているのであるうか。そしてとくに、文化大革命に鼓吹された若い世代は政治をどう考えているのであろうか。

想えば、昨年四月の驚天動地の天安門事件は、毛沢東の言葉を借りるなら、まさに「造反有理（謀叛には道理がある）」であったのだが、この建国以来初めての民衆の自覚的な政治参加は、官憲によって徹底的に鎮圧された。反面、今日では価値の根本的な逆転が起っているながら、指導者たちは、今回の十一全大会の華国鋒政治報告に見られるように、天安門事件には一言も言及せずに、諸悪の根源をすべて「四人幫」に帰して、「勝てば官軍」式に大々的な政治的儀式を挙行し、例によって官製デモを動員して勝利の爆竹を鳴らしたのであった。

このような現実のなかで、大衆的な脱政治現象、つまり、政治的アパシーが生じないはずはないのである。今回も、鄧小平再復活を祝うドラや太鼓のデモを尻目に、若者たちは、たまたま北京で挙行されていた国際サッカー試合に夢中になつていったとのユニークな報道があつたが、それは当然に生じ得る帰結であろう。

私はいま、政治的アパシーといったが、本来、中国人は、政治にかんして虚脱するところに、彼らの政治観があるのではないか。つまり、中国社会には歴史的かつ伝統的に政治にかんして虚脱する政治哲学が広く深く根を張っているように思う。この政治にかんして虚脱するとは、「無為にして化する」という老子の政治哲学にほかならない。

老子はこういつている。「天下、忌諱（禁止ごと）多くして

民いよいよ貧し。民、利器多くして、国家ますますくらし。人、技巧多くして、奇物ますますおこる。法令、ますます章（ちやう）われて、盗賊多くあり。故に聖人は言う、われ為すこと無くして、民おのずから化する。われ静を好んで、民おのずから正す。われ無事にして民おのずから富む。われ無欲にして、民おのずからおさまる。」（老子「五十七章」）

このような政治観が中国社会の底流に存在しているかぎり、政治が統治の機能的なシステムと化し、国民が一体となつて一つの国家目標に向つて邁進することはきわめて困難である。ある外国の碩学は、中国と日本との政治の異質性に着目して、日本は中央集権化に馴れており、文化的にも経済的にもよく組織化され、中央集権的な行政機構が生活の末端にまで行きとどいているのたいし、中国ではそのような中央集権化に成功したことはなく、ローカルな段階でさえ行政は充実にない。国民はつねに権力者にたいして自ら目を向けており、

非協力的である、と述べている（以上の諸点については、今堀誠二「中国現代史研究序説（勁草書房）」に詳しい）。

このように考えると、今日の中国はそれと正反対であり、指導者と大衆が一体化し、一つの国家目標に向けて八億民衆が一致団結して勇猛邁進しているというイメージと大きく異なるではないかと一見思われるであろう。たしかに、毛沢東の政治は、このような中国の伝統的政治観への挑戦であり、中国社会を指導者と大衆との団結による統一と団結の民族共同体にしようとしたものであった。だが、そのような毛沢東の挑戦は、やはり成功していないように私は思う。政治への一体感が根本的に欠如しているからこそ、いわば指導者のいうとおり、昨日は林彪礼讃、今日は林彪批判、昨日は批鄧、今日は擁鄧と化することができるのであって、大衆はこのように目まぐるしい政治の変転を自己を剝離し、そして冷たく政治を見くだして、表面的に指導者に和する処世術を身につ

結婚式●御会合 レストラン●喫茶

(和・洋・中)

長野 **グランドホテル**
二つまや

長野市大門町501
●TEL(0262)32-1231代

ホテル
二つまや
別館

長野市県町459
●TEL(0262)34-1255代

けてしまっているのである。つまり、政治不信とニヒリズムこそ、先に引用した「無為にして化する」政治哲学に見られる中国人の本来的な政治観なのである。政治不信といえば、昨年の天安門事件に際して、次のような七言律の一節に出会ったことに私は注目せざるを得なかった。

冷眼蓬雀翻妖風

熱血一腔染江流

これは対句であるが、大意は「蓬な雀たちが妖い風（妖は「姚」つまり姚文之を指す）を翻せるのを冷たく眼つめ、（いつの日か）熱血が一きよに腔（はら）して、江（揚子江、江は江青夫人を指す）の流れを染めん」となる。この場合には、積極的な現体制批判の熱情が見られるが、しかし、文化大革命の熱狂にもかかわらず、根本的には、そのような政治的現実を大衆は冷たく見ていたのであった。中国人はこうして政治を目下し、政治に不信感を抱き、従って中国人にとって政治とは、本来、統治のシステムではなくして、権謀術数が角逐し、渦巻くところの「三国志」的なドラマの世界だと考えるのではなからうか。従って、政治に期待できない部分は、結局、地縁血縁的な共同体や東洋的な閥族社会（今日の社会主義中国の政治でも、つねに閥族主義があらわれている。いわゆる江青女史らの上海グループはもとより毛沢東、華国鋒らの湖南省湘潭県グループ、李先念、陳錫聯、許世友、李德生

らの湖北省黄安県グループ。なお中国の「県」は日本の「郡」程度の大きさの場合が多い）にそれを求めるのであろう。こうした中国の政治的世界は、結局のところ、「十八史略」の有名な一節、

日出而作 日出でて作り

点入而息 日入り息う

鑿田而食 井を鑿りて飲み

耕田而食 田を耕して食う

帝力於我何有哉 帝力いづくんぞ我にあらんや

に見る「帝力いづくんぞ我にあらんや」という脱政治の哲学につながってゆくのである。

ひるがえって、日本人の政治観を考えるならば、中国人のそれとは根本的に異質ではないか。中国人は政治にそもそも期待しないのにたいし、われわれ日本人には、政治への期待が少なからず存在する。政治への期待の存在は、だから政治への批判につながってゆく。中国人はまるっきり政治を期待せず、政治を見下しているから、政治がよくなる、とか政治が日常生活をよくする、とかは本来的に考えない。これにたいして日本人は小はドブ板の改修や町会政治から大は天下国家そして外交まで、政治に期待し、だからつねに政治を批判し、政治が問題を解決すべきだと思ふのである。われわれは日中関係を考える場合にも「同文同種」であるよりは、「異母兄弟」

であるという視軸のなかで問題を見つめてゆくことが重要であらう。つまり日本人は、その政治観からしても問題の解決を求めたがるのにならして、中国人においては問題の解決というものはあり得ない。この点では「妥協」と「矛盾」こそが中国人にとっての日常性であり、また永遠なのである。よく知られている言葉に「小異を捨てて大同につく」という警句がある。これは、いかにも日本人的な解釈（実は「誤訳」なのであって、本来は、「大同を求めて、小異を存す（求大同存小異）」というのが正しい）。

さて、この辺で私は地方政治、信州の政治について語らねばならない。だが、この点については私には語るべき材料がない。あえて、蔽（おほ）ひの私見を語るなら、ここ数年来、信州の教育をめぐる生じた「総合選抜制」問題の今日的な帰結などは、まさに信州の政治と県民性の一つの性格を物語っているのではないかと思われるほどユニークな政治ではなかったか。私個人の見解としては、教育とは本来、「孟子」に発するその語の東洋的語源からしても、ラテン語の educare → educatio → education に由来する西洋的語源からしても、成人が幼体に知識を伝達し、彼らの社会化と人格形成を育成することにこそあり、まさに教える者と学ぶ者との不断の緊張関係を伴いながらもすぐれて牧歌的・人間的な営為なのであって、私個人としては、そこに信州教育の本質があったと体

験的に回想し得るのである。それほどまでに私が生まれ、育った信州・松本の幼稚園（園長は地方史家の一志茂雄先生であった）から高校（校長は岡田甫先生であった）まで、よき師に出会い、よき学舎に恵まれ、自治の精神を満喫できたので、いわば乱塾による教育のより一層の荒廃をもたらすであろうことが、たとえば東京都の経験によって目に見えている。「総合選抜制」をなぜ教育の先進県である長野県が実施しようとするのか、どうしても理解できなかった。本誌「地域と創造」の創刊号の特集「信州の教育を問う」のトーンだと「教育の先進県」という認識がそもそもこと教育においては、「平等の神話」はしばしば怠惰と平準化をもたらし、個性を押しつぶすように思われてならない。文化大革命によって盛んに教育革命をおこなった中国でも、告発されねばならないような者が、私には逆に、最近の教育者が人格の平等と能力の均一化とを混同しているところにこそ教育の荒廃があるような気がする。教育革命の陥穽（おと）に気づき、今日では元に戻ってしまった。しかし、いずれにせよこの点でも「総合選抜制」問題の当面の結着は、信州の政治的特質を色濃く反映しているといえるのかもしれない。

信州の政治特質といえば、一昨年の夏、当時、東大総長だった西洋史家の林健太郎氏から一人のアメリカ人政治学者を紹介されたことがあった。モルモン教で有名なアメリカはユ

タ州ソルト・レーク・シティのプリガムヤング大学からやってきたリー・フアンスワース教授である。「信州の地方政治」を研究テーマに選んで私の郷里の松本市で一夏を過したいと希望なので便宜をはかってほしいとのこと。フアンスワース教授はたしか九人の子供と一緒に一夏を松本市の浅間温泉に滞在し、長野県議会と松本市議会を傍聴したりしてフィード・サーベイをおこなわれた。その調査結果が出たところ、私のゼミの会が主催してさやかなシンポジウムを「現代日本の政治——中央と地方——」と題して神田の学士会館で学生たちを交えて開いたことがある。たまたま滞日中で中国の地方政治に詳しいハーバード大学のエズラ・ヴォーゲル教授、同じユタ州の州立大学の若い政治学者ラン・オールド・レベナー助教授、それに地方主義についてのユニークな著作をもち私の郷里で二軒おいて隣の「お兄さん」だった三輪公忠上智大学教授にバネラーになってもらい、私が司会をして信州の地方政治を論じあったのだが、まさに「ねまわしの政治学」によって表面上はコンフリクト（対立）が消えてしまいう信州の政治がアメリカ側から見るときわめてユニークで効率的だとの見方に接して、いささか面はゆい思いをしたのである（このシンポジウムについては私のゼミの会の雑誌『歴史と未来』第四号にその内容を収録してある）。

だが、私は「ねまわしの政治学」にたけた信州人も、こと

中央と地方という座標軸では、ある種の根強いコンプレックスをもっているのではないかと思う。そして、このコンプレックスは同時に「信州ナショナリズム」のような一体感へとでさえあって、海外で「信濃の国」の県歌を聞く機会も多い、排他的な優越感と閉鎖性の共存をもたらすのではないかと。かつて私は、ある雑誌に、最近「事故のてんまつ」で話題を集めた白井吉見氏の大作「安曇野」（筑摩書房）の批評を求められたとき、「私はこの作品に、行政的には日本の近代を担った薩長体制にたいする、信州人の反発とコンプレックスを見出す。新宿と安曇平を繋ぐ多彩な知的群像を描いて、信州人は文化の面で日本の近代を担ったことを別出しようとする執念」がある、と書いたことがある（『諸君』一九七四年六月号）。そうしたら間もなく、白井吉見氏は「信濃毎日新聞」（一九七四年七月十日）に「安曇野」と信州人」と題するエッセイを書かれ、冒頭に私の書評を引用して「作者にはそんなケチな考えはゆめにもなかった」とお叱りを受けた。だが、白井氏がこうして私の文章を冒頭に引用して立論されたこと自体、私の見方がまんざら的是ではなかったことの逆証明ではないかと思わざるを得なかった。

（一九七七年九月五日。軽井沢、中央公論南原山荘にて）

（東京都在住・松本市出身）

＜個人研究＞

童謡と信州

堤 保徳
(NBS勤務)



久し振りにがらくたを整理していたら、華やかな飾りのついたオルゴールが、ほこりにまみれて出てきた。去年までは天井に吊るされ、私の子供たちに「ゆりかごの歌」を聞かせてくれたオルゴールである。私にとっては古典である。そして、ベビー・ベットから見上げながら聞いていた彼等は、いま、それを歌うまでに成長した。

私は子供たちに童謡をほとんど教える。吸取の早さに驚く。そして「ゆりかごの歌」

をはじめ、その童謡の多くが信州の生んだ作曲家によるものが多いことに更に驚く。あの、中山晋平、草川信、海沼実の作品が実に多いのである。意識的にそうするわけではない、これらの人の歌が良い歌だからだ。子供等が早くこの歌に気づくことを私は待っている。

さて、われらの偉大な童謡作曲家——中山晋平（明治二十年三月二十二日～昭和二十七年十二月三十日）、草川信（明治二十六

年二月十四日～昭和二十三年九月二十日）、海沼実（明治四十二年一月三十一日～昭和四十六年六月十三日）——私はこの三人に魅せられてから久しい。

「肩たたき」「雨降りお月さん」「背くらべ」（中山晋平）。「ゆりかごの歌」「夕焼け小焼け」「どこかで春が」（草川信）。「お猿のかごや」「みかんの花咲く丘」「里の秋」（海沼実）。いずれも日本を代表する優れた曲ばかりではないか。私の、私と同世代の、いや日本に住む人々の胸に残る歌が、同郷の人の手で作られたのは誇らしい。歌っていた幼い頃はそのことを知らず、それらの童謡で成長した後、はじめて気がついたことは、私の放った歌が、長い長い年月を経た後、友の心の中に息づいていた。と歌うアメリカの詩人ロングフェロー（W. H. Longfellow）の「矢と歌」に似て感慨深い。

THE ARROW AND THE SONG

I shot an arrow into the air,
It fell to earth, I knew not where;
For, so swiftly it flew, the sight
Could not follow it in its flight.